

らじっく

自分らしく、粋なくらし

まちづくり・生涯学習情報誌

2008.8

秋風月号

Vol.21

あきかぜつき / 旧暦8月15日は仲秋の名月ということから月見月等の異称がある8月。さらに深まりゆく秋の月であることから、秋風月などの別称があります。暑い毎日だなど思っているうへえはすっきり秋を感じさせられます。

特集

P1

「つたえる」

映像作家が涙した絵本、手作業で25カ国の子どもたちへ ● NPO法人 ANTI-Hiroshima
自分の足で歩いた、県内800カ所の名水 ● 広島の水場を守る会
オフィス街のフェアトレード・カフェ ● NPO法人ピースビルダーズ
ほたるかご作りで地域おこし ● ほたるの宿の会
らじっくキャンパス ● 広島修道大学の環境サークル「がんば」

● プラザ通信

● らじっく情報の森

● ひろしま八区イベントガイド

P11 P9 P5

「つたえる」

〜広島から世界へ、 世代を超えて大人から子どもたちへ〜

わたしたちの住む地域に伝わる、昔の智慧や、大切なこと。それはときに、遠い外国でも、共感されることがあります。広島から世界へ、世代を超えて大人から子どもたちへ。大切な思いや経験をつたえようとしている人たちをご紹介します。



▲各国語版に翻訳された「おりづるの旅」。Dari語は右から左に読み進むため、背表紙を裁断して綴じ方まで変えている。完成まで試行錯誤を重ねた

▼寄贈された「Sadako's Prayer」を読むパキスタンの子どもたち



をもとにした独自の絵本「Sadako's Prayer」を製作。「おりづるの旅」の翻訳本と一緒に、世界25カ国の子どもたちに配布しています。
この「Sadako's Prayer」が今年7月、日本語版「サダコの祈り」として、日本で出版されました。
「広島に根ざし、ここにあるNP Oでなければできないことをやっていきたい」。自身が被爆二世でもある代表理事、渡部朋子さんの思いの結晶といえそうです。

映像作家が涙した絵本 手作業で25カ国の子どもたちへ

アント ヒロシマ
[NPO法人 ANT-Hiroshima] ☎082-502-6304

絵本に共感した涙が
言葉を超え、外国で配布へ

2003年に出版された絵本「おりづるの旅」(PHD研究所)。被爆後9年もたつて原爆症を発病し、回復を祈って千羽鶴を折り続けながらも、中学1年生で亡くなった佐々木禎子さんの物語です。

NPO法人ANT-Hiroshimaが、アフガニスタンの映像作家ヌーラ・サイフィさんを、平和記念公園に案内したのは出版年と同じ2003年。原爆の子の像の前で、この「おりづるの旅」を通訳の女性が見聞させると、サイフィさんはいきなり泣き始めました。「アフガンの子どもは禎子と同じ」。

その後、帰国したサイフィさんから「母国でこの本を広めたい」と協力を求められました。
出版社側に打診したところ、著作権の問題があり、外国語版の出版は困難とのこと。しかし、「購入した本の加工なら可能」という条件付きの許可を得て、ANT-Hiroshimaの翻訳作業が始まりました。

「一枚一枚の手作業を支える子どもたちに伝えたい」思い関係者に協力を募り、作業に関わる各調整を積極的に行ってきた森井孝子さん。アフガニスタンの言葉であるDari語をはじめ、英語、

ネパール語、ベンガル語、スペイン語などへ翻訳しました。そのシールを一枚一枚、絵本の文章部分へ貼り付けていきます。多言語を扱うため、貼るページが間違っていないかどうかなど神経を使います。
「世界中の言葉へ、本を新しく生まれ変わらせていくのは、知らない世界を見るようで楽しいわよ」と森井さんは明るく言います。

サダコの物語が、 パキスタンから日本へ

ANT-Hiroshimaは1989年「アジアの友と手をつなぐ広島市民の会」として発足以来、平和教育、国際平和協力活動など様々な事業を行っています。昨年NPO法人となり、名称も現在のものに改めました。

この「おりづるの旅」の翻訳活動は新しい活動につながりました。パキスタンの画家、フアウジア・ミナラさんとともに、佐々木禎子さんの物語

自分の足で歩いた、県内800カ所の名水 環境を守ることは平和を守ること

「広島の水場を守る会」
082-2519-0830

全国を放浪した後、 情熱が向かったのは 地元の「水」

フリーライター・錦川鯉さんのライフワークは、名水を調べ上げ記録に残すことです。5年間で訪ね歩いた水場は県内だけで800カ所を超えます。

30代で大病を経験してからは、「好きなことをやろう」と決めた錦川さん。山歩きで出会った「水」を残すこと、次世代へ引き継ぐことに情熱が向かいました。古い文献を探して読み、古老に聞き取りをし、草に埋もれた水場を探し当てて…。膨大な資料をまとめ上げ、「錦川鯉の名水賛歌」Vol.1〜5

を刊行。続編のため、今も精力的に歩き回っています。
訪れる人もまれな水場に引き寄せられた出会い

名水の取材を通じて知り合ったのが、被爆体験証言者の宇根利枝さんです。

水場のことを地元の人に聞いてみる時のこと。もうこの水を汲みに来る人はまだだよ、と教えられながらも「おばあさんが年に1回、必ず来るけどねえ」。そんなやりとりをしばしば経験します。不思議に思っていたところ、それが1955年から「原爆献水」を行っている宇根さんのことだと知りました。

保育士だった宇根さんは、原爆の惨状の中、水を求めながら亡くなっていた多くの被爆者に水をあげられなかった無念さから、各地の名水を汲んできては、市内120カ所以上の慰霊碑などで献水を続けてきました。
宇根さんの名水探訪は、原爆の

犠牲者に清水を飲ませてあげ、その霊を慰めたいとの思いからです。バスを乗り継ぎ、山道を歩き、「いい水を見つけましたから、しっかりおあがってください」と献水します。

水はすべての命の源。 それは平和へつながること

錦川さんは宇根さんの話を聞いて、自分の活動の意義が大きなものにつながると思えました。「環境(水場)を守ること、平和を守ること」は、同次元で実現すべきこと。二人の思いが重なり、「広島の水場を守る会」の活動が始まりました。

今年も8月6日の早朝5時から西区己斐上町にある滝の観音に行き、滝に打たれる「自然体験」を行い、原爆献水のための水を汲みます。
その後、平和記念公園に移動し、被爆者の遺骨が納められた「供養塔」に献水します。全国から会に届けられた、各地の名水も一緒に供えられます。



▲西区己斐上町にある滝の観音で祈りを捧げる宇根利枝さん

写真提供/2007.8.6 錦川鯉



▲原爆献水の水を汲む会員の佛通川鶴さん



▲本を手に苦労話も笑い話に。代表理事・渡部朋子さん(左)と森井孝子さん

▶FT商品のルワンダ・コーヒー豆(500g)3000円、ケニア紅茶(ティーパック25袋入)315円など
 ◀ルワンダのコーヒー、カフェ・マラバ(クッキー付)400円
 ▼オフィス街のビルの2階。テーブル・カウンター席のほか畳敷きのスペースもある。アフリカ大陸をかたどった壁掛けなどの雑貨も販売している



昔から伝わる、夏の風物詩。ほたるかご作りで地域おこし

【ほたるの宿の会】 広島市湯来ニューツーリズム推進実行委員会 ☎082-504-2602(広島市観光交流部内)

ほたるかごの作り方は、地元の方たちに伝わるもので、少なくとも戦前には作っていた①地元の人が「みま」と呼ぶ麦。大麦や小麦と比べ、黄金色で美しいと言われている②茎を切りそろえ、湿らす③底になる部分を作る。四角形や六角形などさまざま④茎を継ぎ足しながら編んでいく。自然にらせん状になる⑤上まで編んだら留めて完成。ちょうど6月に実る麦の茎を上手に利用した、昔ながらの遊び心



戻ってきたホタルたちが地域活動のきっかけに

佐伯区湯来町の伏谷地区。五日市の市街地からほど近いこの地域を流れる伏谷川は太田川の上流部。安佐北区を大きく迂回して広島湾に流れ込みます。この伏谷川、ホタルの名所でもありません。昔は当たり前のようにいたホタルも高度成長期ごろから水質の悪化により減少。それがここ10年で改善され、特に6年前は大乱舞の年だったそうです。

「ホタルで地域おこしをしよう」。町内会長の木本俊文さんは、まずはやってみようという性格。地域の有志を持ちかけ、2002年「ほたるの宿の会」を立ち上げました。

かごに宿る先人の思い。それが人を引きつける!?

毎年6月中旬ごろから、伏谷のホタルが飛び始めます。それに合わせ、国道433号沿いの伏谷文化セ

だれでも参加できる、小さな国際貢献。オフィス街のフェアトレード・カフェ

【NPO法人 ピースビルダーズ】 ☎082-247-0645



▲「FTが何かのきっかけになれば…」と、フェアパコ店長の渡邊さん

国際NPO事務所に おしゃれなカフェが隣接!

中区大手町に本拠を置くNPO法人ピースビルダーズ。7名のスタッフが紛争後の国の支援や平和構築などに関する国際協力事業を行っています。

アフリカ東部で起こったルワンダ紛争で虐殺から逃れてきた難民1268人をかくまったホテルマンを描いた映画「ホテル・ルワンダ」では日本語字幕を監修。現在は、シエラレオネで、平和活動に従事できる人材育成に力を注いでいます。そんな国際的な活動を続けるピースビルダーズが事務所の隣りに開いたのがフェアトレードカフェ「カフェ・パコ」。だれでも利用できる、おしゃれなカフェです。

コーヒーを飲めば、途上国への小さな貢献

オープンしたのは昨年9月。「ホテル・ルワンダ」での活動で、生産量が非常に少ないルワンダコーヒーに出会ったのがきっかけです。フェアトレード(FT)とは、公正な値段を保証して行われる貿易の形態のこと。途上国の生産者へ適正な対価を支払うことで、経済的自立や発展を助ける取り組みです。FTで輸入したルワンダコーヒー

は品質の面でも高い格付けを得た特別な品。「カフェ・パコ」ではコーヒーの他、ケニアの紅茶3種類などのFT商品も味わえます。

ここでのひとときが、何かのきっかけになれば

アジア風にもアフリカ風にも見える内装は、スタッフ3人の手づくり。大学で国際学を学んだ店長の渡邊さんは、「どことも似ていない店内にしたかった」。

FT商品以外にも、「ワッフル(ドリンク付)(800円)や「ライダさんのひよこ豆カレー(ドリンクとヨーグルト付)(900円)など、軽食やランチも楽しめます。また、講演会など貸会場としての利用も、予約すれば可能です。

「普段は見えない途上国の生活や息づかいが、商品という具体的なものを手にして、身近に感じられる。FTの意義はそんなところにあるのかも」。渡邊さんはそう考えています。

カフェ・パコ
Cafe Paco

☎082-247-0645
 住 所:中区大手町3-8-3
 今井ビル2階
 中央郵便局向かい
 (市役所前電停下車徒歩1分)
 営業時間:午前11時~午後6時
 定休日:月曜日、日祝
<http://www.peacebuilders.jp/paco>



した。このように身近なことから実行し、一人ひとりの意識が変われば環境も変わると思っています。何事も、体験しないと分からない。実行することに意味はあるのだと思います。

また、「がんば」の活動の一つの沼田公民館主催の「おくはた分校」では、以前は、大人と子どもがうまくコミュニケーションを取れていなかったのですが、現在は僕たち学生が大人と子どもの架け橋になり、楽しく活動しています。このように、自然環境だけでなく、人と人とのつながりを大切にする良い人間環境も作っていきたくと思っています。

これからの活動として、現在大学では清掃会社が入ってゴミの回収を行っています。今後は僕たちがゴミの分別指導を行えたらと思っています。学外では、近隣の広域公園で行われる様々なイベントでの啓発活動も考えています。「がんば」のモットーは「楽しみながら環境について考える」。やってみないと分からない。何よりも感じる事が大切だと思います。自分から動いてもらえるよう、僕たち学生が発信していきたいです。

今回、初めてレポートに挑戦しました。つたない文章ではございますが、最後まで読んでいただきありがとうございました。

らしくキャンパス

学生から見た学生による市民活動紹介

レポーター: 広島市立大学 マスコミ研究会 大下 陽子



第一回目の「らしくキャンパス」は、広島修道大学の環境サークル「がんば」をご紹介します。自然体験学習やボランティアをされているのですが、その活動の奥深さに感動しました。今回は、そんな「がんば」の代表を務める米川さんにお話を伺いました。

僕は「がんば」の活動に参加して、それまで難しく考えていた環境を身近に感じるようになりました。自分が楽しいと思えば、周囲の皆さんにも環境活動の身近さや楽しさを伝えるようになってきました。

6月1日に開催された環境の日ひろしまでは、紙すきのブースを出しました。紙すきをやるに当たって、部員で勉強会を行い、「本当にリサイクルは有効か?」「紙すきのブースを出す意味はあるのか?」ということを話し合いましたが、最終的に紙すきが有用かどうかというところではなく、紙の大切さを学んでもらうことに意義があるという結論に至りました。みなさんが環境について考えるきっかけづくりになればと思います。

自分自身も活動をしていく中で環境に対する意識が変わりました。例えば、原付に乗って通学するとき、アイドリングストップを心がけるようになります。